

世界の森の生態資源と先住民社会の変貌

山田 勇（京都大学名誉教授）

人類学との関わり

「近衛ロンド」というのが京都にありましてね。当時、人類学の講座というのが何所にも無かったんですが、それを作ろうと梅棹（忠夫）さんが言いだし、そのきっかけになるような集まりを、一週間に一回ずつ、近衛通りにあった京都大学の同窓会館でやるということで、「近衛ロンド」と名付けて、今はもう随分と偉かなられた若い研究者を集めて、人類学を教育するという場が設けられました。それに参加したのが最初でして、それから人類学の人とはいろんな付き合いがあったんです。

私は森林生態学が主な仕事なんですが、そんなことで人類学の人との付き合いが始まりました。それに、人が割と好きな方で、人と森との関係というようなものを、世界あちこちで見えております。最初は東南アジアに行きまして、東南アジアで森に入っているうちに、いろんな人と付き合いができました。最初は森林ばかり関わってたんですけども、途中でそちらが面白いなと思うようになりまして、早いことそっちの世界に入ろうと思ったんですが、森林の方が忙しくて、なかなか抜けられません。結局定年間近になって、ちょっと時間ができて、そういう人と割と密に付き合いということになりました。最近では、内堀基光さんの「資源人類学」の総括班に入れていただき、多くの人類学者とつきあいました。これまで、百回以上にわたって各地の森へ出かけて、あちこちの人と森との関

係を中心に考え、それを踏まえて、今後のわれわれの在り方みたいなものを考えている、というのが今私のやっていることです。

スイバ

「スイバ」というのは京都の言葉なんですが、子どもにとっての宝物があるというようなところなんです。で、そういうところから発しまして、その生態資源というようなコンセプトで、世界のあちこちの森林を見ていくというような恰好で、今日の話をもって行きたいと思っております。

スイバなんですが、京都の子どもにとって、宝物がある秘密の場所ということで、私は衣笠山の麓に住んでいたんですが、私どもが子供の時はですね、学校から帰るとすぐに鞆を放り出して山へ走って行って、そこでサワガニとかか、タケノコとかマツタケとかを探して満足する。そういう所に行けば必ず何か報われるという、心が非常に満足する癒しの場という雰囲気のところなんです。これは決してオープンな場所ではありませんで、ごく少数の、その場所に明るい仲間だけが知っている場という所です。

今考えてみますと、私がいろいろ仕事をしてきたのはですね、結局、世界にあちこちスイバを見つけて、あちこちまた訪ねて行く、というのが結局自分の夢なのかなあ、というような感じがあって、あちこちにスイバラしきものを作って喜んでいる、というようなところなんです。

で、もうちょっと別の意味でスイバというものを大きく捉えますと、茶室とかあるいは禅寺とかですね、枯山水の庭とかいう、まあ瞑想の場のようなところ、それがまたさらに大きくなって巡礼の道の行きつくところとか、天空に接するところとか、天空にそびえるところとかに、最終的にはいくんじゃないかと考えているところです。

サワガニ取り

私の小さい時の写真です。この3人でサワガニを採っているところです。当時カメラを持っている人なんてほとんど居なかったんですが、たまたま通りかかった人が、ちょっと撮ったろうということで、しかもそれを後で送り届けてくれはってですね。それでわりと貴重な写真だと思うんです。顔を見ていただければ分かると思いますが、とにかく楽しくて仕方がない、サワガニの茶色の姿を見るときもう興奮して、という感じです。



サワガニ捕り

当時の私の家は金閣寺の近くにありまして、半径大体10kmくらいの辺で、10代はほとんど過ごしたわけです。それでもう十分満足しておりまして、沢池というのが一つのわれわれの基地みたいなところなんです。で、沢池から普堤の滝を通過して北山へ降りて帰るというのが最長の距離でして、西のほうへ行

くと嵐山というような。そんな北山の端のほうなんです、まあこういう世界にいまして、右の半分は京都市内にあるわけなんです、京都市内に行くということはほとんどありませんでした。で、ほとんどの時間を、ここで過ごしてそれで十分満足できる世界というのがあったわけです。今とは全然違う空間ですね。

海外での調査

海外の調査歴は116回です。ほんとによく行ったなあと思うんですが、これくらいしかありませんので、とにかく1965年からつい最近まで世界のあちこちに行っております。一番多いのは東南アジアです。東南アジアが40回くらいですが、あと中国とそれから南米が多くて、そのあと内堀さんのプロジェクトのときにはヨーロッパに行かせていただきまして、大体世界中の森のあるところは一応見たと思っております。

最近、ラダックと言いまして、インドの北、パキスタンと中国の間にあるヒマラヤの山中ですが、そこに行きまして、いろんなことを考えております。そこは、巡礼の地でありまして、神との接点といいますか、遙かに遠い土地で、山、湖、お寺、宮殿とか、非常に美しい世界が広がっています。そこで、向こうの人は、五体投地をしながら、神に接する。そういう彼らの動きを見てますと、苦しみ後の清涼感と言いますか、達成感というもの、解脱の喜びのようなものになっているんですね。

神の世界へのアプローチというのは大変苦しいけれども、それが終わると、大変いい世界に入れるという、そんな喜びのためにああいうことをしているんじゃないかな、という気がしております。

ラダックのゴンパ

ラダックの山中に、ゴンパというチベット仏教の寺が沢山あります。ラダックはシャングリラというふうにも呼ばれておりまして、その拠点となるのがこの仏教寺院です。僧房があってそこで坊さんが瞑想にふけっている。周りは柳とポプラしか木がありません。それとジュニパーがちょっとあります。川谷の底にあって、前面に、大岩壁と雪山があるという、非常にまあ多様な立地の中に超然とそびえるのがゴンパです。

ゴンパの一番大きなのがラサのポタラ宮だと思っていただければいいんですが、その小型版で、地形を利用して、丘の上に建っている。下の僧房には僧が暮らしている。お祈りなんかは上でやる。そういう空間になっていて、ちょっと違う世界ですね。

ザンスカールという所は秘境のなかの秘境なんですが、この奥をずっと行きますと、なかにネパールから来た人の部落なんかがありまして、大変面白いですけども、こんな中を行きますと、前に雪山があって、その雪山が非常に迫力のある風景として、ゴンパの前に出てくるわけですね。それでゴンパというのは常にこう、雪山というものに囲まれた位置にあってですね、それはおそらく、神の世界に近いというようなことを望んでのことだと思えます。



ラダックのチエムデ・ゴンパ

ラダックに2回ほど行きました、そのゴンパを、あちこち上ったり下りたりしてる間に、スイバとゴンパとに共通点があるというふうに考えました。要するに普通の場合ではない場であって、奥まった地形のどんつきにあって、アプローチが大変素晴らしい。それから周辺がそれなりに整備されていて、前面に白い山がある。非常に少数の隠れ家的なもので、神的なものへの接点というようなものを感じるんですね。まあ小さい時に思っていた、スイバの行きつくようなところは、結局ゴンパのようなところではないかと思っているわけです。

生態資源

私は、生態資源というコンセプトで、熱帯の森林を中心に仕事をしております。生態資源を、生態環境資源、生物資源、人間生態資源の3つに分けております。

生態環境資源はいわゆる地球環境問題なんかで言われているもの、生物資源は生物多様性なんかで言われているものですから、あまり新味がないんですが、人間生態資源というのがミソです。この部分は、人類学の方ではかなりやっておられたと思うんですが、少なくともわれわれ自然科学の生態学者は、こうしたことをほとんど考えずに一生懸命に木を測っていたというようなところがあります。

そのためにいろいろ問題が起こったという反省から、生態文化資源と心の世界というように、もうちょっと焦点を当てないと話が進まないのではないか、と考えているわけです。で、この心の世界の中の宗教とか哲学とか、その辺の分野を最終的には詰めるつもりで、ゴンパの話を持ち出したわけです。

熱帯森の研究

世界のあちこちの森を見ているのですが、最初に行ったのは熱帯の森で、そこがやはり一番面白い。そこはかつては無尽蔵な資源があったわけですが、それが戦後の独立した発展途上国にとって、最もてっとり早く外貨をかせぐ場であって、瞬く前に攪乱されてしまったという歴史があります。

日本においては、熱帯雨林研究というのは非常に長い歴史がありまして、簡単に年表をさかのぼりますと、一番最初は今西錦司先生です。で、今西先生の弟子に吉良竜夫先生という方がおられますが、この方が戦中戦前に、ボナベ島に行かれたんです。その時の目的は、最終的には熱帯雨林であったと書いておられますが、熱帯雨林はなかなかいけなかった。で、本格的に仕事が始まるのが戦後の50年代です。大阪市立大学の梅棹忠夫先生、それから吉良先生などが、タイ、カンボジア、ラオスへの遠征というのを何回もやられまして、分厚い調査報告書が出されています。これが世界で初めての熱帯雨林の生産力生態学の業績になっております。

1964年から国際生物学利用計画（IBP）というのがありますが、これは世界で初めて生物学者が集まって、ちょうどいまのCOP10とか、地球環境問題なんかを扱うのと同じように、世界中の生物学者の協力によって、世界の生物の生産力を測ろうという動きがありました。そのなかで、71～73年まで、日本とイギリスとマレーシアが中心になって、マレーシアで熱帯雨林の生産力をはかるという仕事で、初めて熱帯雨林というのがどんな風になっているのかということがわかったわけです。

熱帯雨林については、”Tropical rain forest”というリチャーズ（Richards, P. W.）の有名な本がありますし、その後ホイットモ

ア（Whitmore, T. C.）の本が出ています。こういう本は、イギリスの植民地で1920年代くらいからの業績をあつめているクラシクな本ですが、新しい分野での貢献という点では、このIBPというのが非常に大きく貢献したわけであります。

熱帯林の急激な劣化

1980年代になりますと、東南アジア各地で伐採が進行します。60年代くらいから始まったインドネシア、マレーシア周辺でほとんど伐採が完了したような形で、劣化が非常に進むわけです。

東カリマンタンでは300万haが焼けたという大火災があったわけですが、その後、イギリスのロイヤルソサエティーやアメリカのスミソニアンも世界中でプロジェクトをやるという感じで、日本も含めて世界中の研究者が熱帯雨林の重要性というものに注目して仕事を始めたわけです。

で、インドネシアとかタイも、自分たちがあまりに森を切りすぎているということを中心に言われまして、結局はインドネシアでは原木を輸出禁止、タイでは伐採を禁止するという方策を出したんです。が、タイの場合、自分の所の木は切りませんが、ラオスとかミャンマーで切ってますし、インドネシアでは、原木を輸出禁止と言いましても、ベニアを作るためには切っておりますので、伐採は一向に止まらないということで、どんどん劣化が進んでいるというわけです。

地球環境サミットと環境プロジェクト

このころからCOEプロジェクトなんかが始まりまして、かなり大きなお金がつくようになりました。90年代は混沌の時代と呼んでいるんですが、われわれの日本熱帯生態学会が設立されまして、最初は吉良先生に会長にな

っていただきまして、今はもう 500 人くらいの若手が東南アジアを中心にした研究に勤しんでおります。

92年にリオデジャネイロで地球環境サミットという非常に大事な会議が行われたんですが、この時を中心にして、世界の熱帯雨林を守ろうというキャンペーンが非常に盛り上がりました。世界中のトップ歌手とかが、アマゾンの先住民を舞台に連れてきて世界に訴えるというようなことをした時です。本当に、茶の間にも毎日のように熱帯雨林の破壊がキャンペーンされたという、熱帯雨林問題のピークというのがこの時です。ところが92年が終わりますとまた元の木阿弥に戻りまして、結局は今に至るまで似たような状況が続いている。

ただそのおかげで、地球環境問題に対して熱帯雨林が非常に大事であるということで、いろいろなところからお金が付きまして、カリマンタンで鹿児島大学が調査をやるとか、サラワクでわれわれがアメリカの研究者と一緒に調査をやるとか、北海道大学が中部カリマンタンの泥炭湿地林でやるとか、ここ10年間非常にいい仕事をしてまして、それが今も続いているというような状況です。

これ以外にもEUとか、アメリカのプロジェクトとか、とにかく世界中が熱帯雨林を中心に動いたということが言えるわけです。で、京都大学の大学院、アジアアフリカ地域研究科というのもこのころ設立されてまして、若手を育てなければいけないということで、大学院にいま2、300人の院生が在籍して、研究しているという格好になっております。

その後インドネシアでは、99年に地方分権化ということになりまして、それまでスハルトさんが全部押さえてたんですが、それが地方に分権されたということで、熱帯雨林を保護するには非常にいいチャンスだったんで

すが、後ほど述べますが、残念ながらそれも上手くいかずに、2004年には津波が来て、非常に大きな打撃を与えたというようなことになります。

それで2005年、このあたりから、いろいろなシンポジウムとかが目白押しに出てきて、みんな忙しくなりすぎて、てんやわんやということです。見ていると大変可愛そうなんです、あんまり忙しくならずにじっくりと森に入って、ゆっくりと調査する必要があるんじゃないかと私は思っております。

東南アジア島嶼部の森林

東南アジア島嶼部の森林を見ていきたいと思います。東南アジア島嶼部は、ご存知のように、ボルネオは世界第3位ですか、それにスマトラ、スラウェシ、ミンダナオ、ニューギニアとか、非常に大きな島で成り立っている群島です。大きな島であることによって、日本でいうラワン材というのが非常にたくさん残っている地域になったわけです。



ブルネイのマングローブ林

次にマングローブ林ですが、私はブルネイに3年ほどおりました。ブルネイは石油のおかげで、木をあまり切らなくていいという恩恵に浴しているわけです。マングローブ林のはるか向こうに泥炭湿地林があって、その向こうに混交フタバガキ林というのがあるん

ですが、それを続きで見られるのはもうブルネイしかない。

マングローブの中というのは、樹木が、支柱根を交差させて非常に歩きづらい。この下にエビや魚が非常によく繁殖するような状況を作っているわけです。ところが、インドネシアでは、かつてはマングローブだったところを全部切ってしまうと、今はエビの養殖池になっている。そんな状況が東南アジア全域に見られるわけです。



マングローブ林の中

泥炭湿地林とその開発

マングローブ林から内陸に入りますと淡水湿地林という非常に瑞々しいきれいな森が出てきます。それからさらに中に入りますと泥炭湿地林というのがあります。

20世紀の初めにオランダの女の先生が熱帯にも泥炭があるというのを発見しまして、泥炭湿地林があるということがわかったわけです。この森は、樹高が50mくらいで直径



泥炭湿地林（落雷の跡が見える）

が80cmくらいの非常によく揃った良い木が生えているわけです。森の中に穴があいているのは雷の跡です。雷は日本の4、5倍の頻度で落ちますが、それが落ちて焼けた部分です。

低湿地の開発というのが最近の一つの大きなテーマになっているんですが、村落単位で、ヤシを切って、ちょっとした水場に少しづつ稲を植えていって、汚いものを徐々に整理していった最後は水田にしていく、というような長い開発の過程があちこちで見られます。

開発の過程でいろいろ失敗がありまして、とくにインドネシアでは「メガ・ライス・プロジェクト」と言われて、100万haの水田面積を確保しなければいけないということになって、そのためにその土地をカリマンタンの泥炭湿地林に求めたわけです。

大きな運河を掘って、この運河から汚い水を出して、さらに別の運河から新しい川の水を入れるということをやったんですが、全部失敗しまして、その上にさらに火事が頻繁に起こって、まあちょっと累々たる屍のような感じですね。非常に大きな環境問題になったわけです。



開発に失敗した泥炭林地域

インドネシアの地方分権による影響

インドネシアで、99年に地方分権になったんですが、地方分権になると、それまでスハ



とほうにくれる移民農家

ルトがジャカルタで支配していた大面積の伐採権というのがなくなって、地方の県が、地方分権で許可を出すようになりました。100ha くらいの小さな面積に許可をだしていくようになると、非常に小さな木、日本の木と同じくらいで直径 30cm とかそのくらいの木まで切ってしまったんですね。

彼らはちょっとお金が入りますから喜んだんですが、この数年後にはもう、こうした小さな木まで無くなってしまった、というわけです。

そういう現場に入りますと、ジャワから移民をさせられた農民がいるわけですが、そこは全部泥炭ですから強酸性でですね、何を植えても上手く育たない。それで旦那はもう逃げてしまって、奥さんと子供が残されて、途方に暮れているわけですね。こういう典型的なパターンがあちこちに見られるようになったわけです。

山地へ行きますと、今度は木がずっと小さくなりまして、着生植物の多い別の世界が広がっております。1500m から上なんです、ここはちょっと別世界でして、あまり伐採は入らない。もっと上に行きますと、モス林になって非常に豊かな着生の光景がみられる。こういう山は、昔から茶畑や西洋人の避暑地というような形で開発が進んだわけです。

失われる「幸せな世界」

ミンダナオのサンボアングの近くで見た風景なんです、一家が農作業を終えて子どもを連れて帰ってくる。貧しいんですが幸せな世界というのがある。

しかし、これがそうも言っていられないというのが現状である、というのが今日の話のトピックです。

伐採がどんどん進みまして、伐採の内容はいろいろと言われてますが、とにかく酷い。やりすぎているということで、そのプナンの人々は怒って立ちあがって、バリケードを作って伐採道路を閉鎖した。さらに EU へ、「今プナンの故郷ではこんなことが行われていますよ」と、キャンペーン講演旅行をした。

プナンの人々は狩猟採集をしていて、1万人くらいですが、そのうち 400 人くらいが現在も狩猟採集をしてるといいます。肝っ玉の座った非常に感じのよい人たちです。

サラワクのムルという国立公園で会ったプナンの青年ですが、サルを鉄砲で撃ったということで、国立公園の中ですから違反になるわけです。ところがこの青年にとっては今までやってきたことをやってるだけなわけです。この時はもう 2 度としないということで、罰はなかったわけですが、こういう風に、自分たちの狩猟の場をとられてしまうと、自分たちの生きる場が失われたということに



豊かな世界

なります。国立公園をつくるということは、外目にはいいように映りますが、こういう先住民の側から見れば決していいものではない。先住民の立場を考えなければいけないと少しずつ言われてきております。

ニューギニアの森と沈香

ニューギニアの方に行きますと、これは米とは違うサゴヤシを主食にした文化圏がありまして、ここはまたちょっと離れた別天地の気がいたします。

そこの沈香は、私がこの20年ほど追っている生態資源の一つなんです。森の中にキャンプを作りまして、5人くらいが寝泊まりしてですね、このキャンプから一人ずつが森の中に入って沈香を探していくという作業をするわけです。

沈香というのは、ナイフで試し切りをした時に黒い線が入ってくると香りの部分が出てくるわけですが、白いままですとまだ香りが出ないわけですね。それでよく知っている人はこういう試し切りをして、白いままですと木を残しておくわけです。先住民は大体そうするんですが、最近外から入ってきた別の島の人たちは、とにかく木があれば全部切ってしまう。どうするかといいますと、切った木を搾って、搾りだして油をとるわけですね。油はアラブの人が非常に好みますので、どんどん切っていくということで、この資源がまた無くなっているという状況にあります。

沈香の流通

先住民の人が取った沈香は、中国人の商人が川の合流地点なんかにはちょっとした店を持ってまして、そこで沈香を買い取るということをやっています。

沈香から油をとるんですが、沈香の材をタンクに入れて下から温めるわけです。そうし

たら油が取れる。小さい油のビンで一本2万円くらいで売れる。中国、香港、バンコク、シンガポールなどは、「南海物産」の卸問屋が大変多く集まっている所です。ここを中心にして東南アジアの資源というのは世界に流通しています。

沈香は最初はボルネオ中心だったんですが、伐採によって原生林がなくなりまして、カリマンタンからパプアのほうに移ったわけです。業者に言わせると「まだまだカリマンタンにはありますよ」ということなんです。値段が上がって、いまではかつての数十倍になっている。

次はロタンですが、ロタンというのは外皮のなかはつるつるの、竹の中空のないような感じで、日本の椅子なんかにも沢山使われる材ですが、これも東南アジアの原生林から採れるもんです。これも原生林が無くなれば無くなってしまふ、そういう類の資源です。

また最近あるのはオイルパームですね。オイルパームは地球にやさしいと言われていますが、決してそうではない。大体オイルパームは、一単位で5000から7000haで一つの工場を作ってペイをするという風になっておりますので、原生林などを拓いて大きな木を全部伐採したあと、今度は徹底的に全部焼いて、その後は等高線沿いに道をつけて、そこにズーっと植えていきます。それがオイルパームになって収穫するというかたちになります。

オイルパームはもともと西アフリカのもので、その原木がボゴールの植物園にありまして、そこから東南アジアに広がったという歴史があるわけですね。資源というのはこういう風に世界的に動いているということが言えます。特に東南アジアは、ゴムとかが原産地にないような利益を生み出したということで、非常にユニークなわけでありまして。

大陸部の熱帯林

いろいろと問題がある熱帯雨林なんですが、アジアの大陸部の 1500m より上の山を見ていきます。

大陸部で一番大事なのはチークでして、このチークをいかに上手く植えるかというのが今大きな課題になっております。

ベトナムのモン族の人は、衣裳が非常に晴れやかで、大体 1500m から上にはこういう先住民の人々が住んでいます。

ミャンマーの奥地のカレン族もそうですが、みな数珠玉の文様をつけて、全部自分で織った衣服を着て楽しんでいる。

インドネシアの東へ行きますと、白いアカシアが出てきて、非常にきれいな、別のモンスーン林というのが出てきます。



北ミャンマーの女性たち

ミャンマーの奥では、非常に素晴らしい山地の風景が展開して、この間に先住民の人々が生活している。ポンカン山という富士山くらいの山に登ったんですが、この奥の方にカカボラージュというミャンマーで一番高いヒマラヤの東の端の山があります。

ブータンは半鎖国的なことをやって大変ユニークな政治形態をもっていますが、そのおかげで山が荒らされずに非常にきれいな山が残っております。



ポンカン山

アメリカ大陸へ

アジアを中心に今まで見てきましたが、広く世界に目を広げて、北アメリカに行きます。北アメリカに世界で最も大きい森があります。そこには先住民の人がおりまして、バンクーバー島にクレイコットというところがあるんですが、そこで先住民の人と伐採会社との争いがありました。そこを見て、その後北アメリカをジグザグに横断するというのをやって、あちこちで先住民の人々の生活を見たわけです。

バンクーバー島の冷温帯の針葉樹林があ



カナダの美しい針葉樹林

る世界で一番大きな森です。ここで、伐採会社がクレイコットという所の天然林を伐ると言い出したわけなんですが、それに対して先住民が反対した。先住民側にはディープエコロジストとか NGO とかが支持して、同時に

観光業者がついて、それから漁業組合がついた。

伐採すると漁業の漁獲量がどんどん減るということが分ってます。それから観光業者は、そこにパンフィックリムという非常にきれいな国立公園があるんですが、そこで伐採されると困るということで、この伐採会社に対して伐採するなと言ったわけです。

ブリティッシュコロンビア州政府はこの間に立って、何とか中庸の道を行きたいと思ったんですが、結局は世界中を巻き込むような戦いになって、最後は伐採会社がここから手を引いたという一つの大きな事件があったわけです。



化石化した森

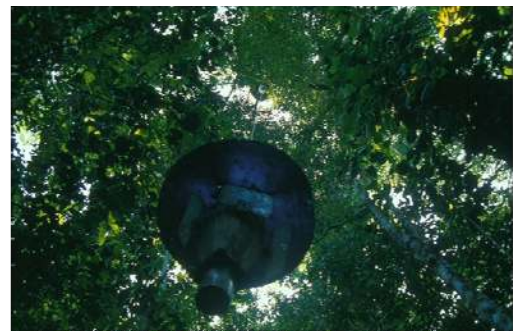
次は、アメリカ合衆国のテキサスです。周りは砂漠で、恐竜の出る中生代の化石地帯なんですけど、かつては大きな大木があって、緑が多かったというようなことが言えるわけです。それをさらに南に下がってマイアミに行きますと、湿地帯独特の樹種がでてきます。アメリカの南部一帯に出てくる植生です。

南アメリカへ

南米の方では地球環境問題の日本のプロジェクトの研究者と世界の研究者とが交流することになりました。スミソニアンがこのあたりで研究してますので、このあたりを全

部一緒に見ようということで、10回くらいにわたって大体南米全部を見たということになります。

中南米に入りますと、パナマにスミソニアンの研究所がありまして、40年にわたってトラブに入ってくる虫を毎日調べている研究者がいます。これを毎日分類して、重さを計って、それを40年続けると、年次変動というのが非常に大きいということが分かってきました。



パナマで40年以上にわたり昆虫を採取

こういうデータが出ますと、これまで1年とか2年で話をしていたのが、話ができなくなる。それで今は、もう熱帯研究といえども10年くらいのデータがないと勝負にならない、という時代になってきておりまして、日本でもわれわれの入っているサラワクなんかでは17年くらい続けて計測をしているということが一般的になっております。

アマゾンの森

ギニア高地という1000mくらいのエンジェルフォールという世界で有名な滝がありますが、下がアマゾンで、上が山です。この石灰岩の上に独特の植生があるんですが、われわれが行ったときはちょうど入山禁止になっておりまして、先住民の人たちの聖地を守りましょうということで、ベネズエラ政府が全部ストップをかけてきた時代です。



ギニア高地

アマゾンを上から見ると実にすばらしい水系が見られます。三日月湖を中心にして、この周辺に非常に細かい植生の変化が見られるわけです。上から見ると確かに大きいんですが、下へ降りますと、それほど大きな木があるわけではなし、東南アジアに比べますと木が曲がってますし、木の大きさもそれほどではない。それをどんどん切っただけで、それがアマゾン問題という世界的な問題になってるわけなんです。

アマゾン・ハイウェイの両側は、ほとんど一日走っても同じような風景が展開します。木を切って焼いて、それを牧場にするか大豆畑にするというような、大プロジェクトが走っているわけです。それでこれを何とかしなければいけないということがあちこちで言われているわけです。

アマゾンでは、火をつけて農地にするということをやっているのは大地主です。大地主というのはだいたい40万haとか100万haとかというような大面積を持っているような地主でして、そういう人はあまり森林のことは考えていない。

ところが伐採会社で、20万haとかそれくらいの面積の中規模の会社をやっている人の中には、研究者に費用を出して、持続的生産をということで、20年伐期くらいの感じでローテーションを行っているというような

例もありますし、地方の政府も、破壊をなんとか止めて保全の方向にもっていきたいとしています。緑の回廊のようなものを作って、動物の通る道を確保しようというような、そういうプラス方向の取り組みもなされています。

パタゴニア

ずっと下がって行って、アンデスの南の端にパタゴニアというところがあります。パイネの名峰の下にあるのが非常にきれいなナンキョクブナ林なんですが、日本のブナに似た木なんです。

ここには先住民がかつていたんですが、ほとんど絶滅してしまったというようなことがあります。圧倒的に人口が少なくて、ブナのように反対してそれをサポートするような人もいない。ということで、部外者がこの森林を切りだしたりしているということがあって、ここもなかなか難しい。

パタゴニアのフィッツロイという、これも名峰なんですが、ここも非常に奇麗な岩山と氷河と、ナンキョクブナの林があるんです。やっぱりここも、点でしか残っていないというようなところがあります。ちょっと見たら日本のブナとよく似ているという感じがするかと思いますが、こういうきれいな林がかるうじてちょっと残っているというようになっているわけです。



パタゴニアのパイネ峰

中国の森

ぐるっと一周しまして、こんどは中国を見ます。中国は皆さんご存知のように、非常に大きな国でして、中国の緑の所というのは非常に少ないわけです。西の方は、全部砂漠とチベット高原になりますし、残っているのは雲南と興安嶺のあたりです。



雲南の2月の風景

それでわれわれは、最初1990年から中国に入りまして、2年間で大体全域を回るというのをまずやって、その後、雲南に集中しました。雲南が終わった後はチベットをやるということで、かなり高密度にこの辺で仕事をしてきました。雲南の2月のというのは実にきれいな風景が展開しまして、白雪の山とナノハナが見られます。

そこからちょっと南の方に行きますと、文化生態村というのがあります。これは600年の歴史がある村を保存しようという動きが村人の中から出てきたというプロジェクトです。村と周りを囲む石灰岩の地域をできるだけ守りたいということで、ミニ博物館を作りまして、踊りとか歌とかいろんな芸術を保存する。この伝統村落と周りの自然保護も行う。

雲南大学の尹さんという研究者なんかに参加するのと同時に、地方の観光局の役人も参加して、全体を盛り上げていこうというプロジェクトが、かなり前から行われています。

これが非常にうまくいまして、今5つほどこうした村があります。雲南だけじゃなくて、中国の他の省がこれに習って同じようなことをやりたいということを言いだしてきているわけです。



雲南の文化生態村

ヨーロッパ・アフリカ・ニュージーランド

次にヨーロッパに行きます。ヨーロッパはいろんな人がいろんなことを言っていますが、私はヨーロッパというのは相当な森の国であって、この有名な城も周りが森に囲まれているというのが非常に大きな意味があると考えております。



ヨーロッパの古城と森

北の端、ツンドラ地帯へ行きますと、寒さと寒風でカバの木が立ち上がれない、なんぼ頑張っても立ち上がろうとしても立ち上がれないというような状況で、50年ほど寝そべっ

ておる状態が見られます。環境が最も厳しい状態になると、こういう風な極限状態になるというわけです。

アフリカは市川光雄さんなんかと一緒に、先生のバカ族の調査地なんかを見せていただいたんですが、東南アジアの少数民族と全然違うのは、やはり圧倒的に力が弱いというような気がしました。東南アジアや中国の先住民の人はやっぱり力があって、それなりに頑張っているんですが、ピグミーの人なんかは人数が少ないですし、とにかく力関係が弱い。それでEUの伐採会社がどんどん木を切っていくというような状況にあります。



アフリカの森とピグミーの人びと

トゥルカナへ行きますと、そういうことはなくて、乾燥地帯ですから、外の人も入らずに、先住民だけが暮らしているというような状況があります。

ニュージーランドのカウリ博物館ですが、ここには非常に素晴らしい森林とともに博物館があります。この博物館を見ると、いかに人々が森林に依存してきたかという歴史が、非常に分かりやすく説明してあります。

カスケード渓谷というのが南の方にありますが、ここはいったん人の手が入ったんですが、そこがまたちゃんと保存されているというようなところなんです。

日本の森

世界をずっと周りましたが、最後に日本です。私の写真を見ていた編集者に最後日本を見せたら、「日本の森が一番いいな」というようなことを言います。確かに日本では、南から北まで、たとえば屋久杉のように、非常にきれいな森林が出てきます。



屋久島の高層湿原

宮崎の綾の森では吊橋がありまして、その奥の照葉樹林を見せる。この照葉樹林文化が、縄文世界、縄文時代の日本を彷彿とさせる。他にも、尾瀬とか、きれいな森があります。

日本の景勝地は、山があって森があって川があって、非常にコンパクトに全部セッティングされ、箱庭的にきれいに整っている。それが日本の森の特徴だと思います。

調和型の林業

日本で重要なのは、林業が環境と調和型だということだと思います。例外もありますが、日本は大規模に環境破壊するというような林業は基本的にはなくて、傾斜地の地場産業として、歴史遺産の継承という形でやっている。

一番大事なのは篤林家というのが何人もいるということ。それから外部とのネットワーク、これが大事です。つまり現場を孤立させないということが一番大事だと思っているわけです。

都市と山村との繋ぎ、先住民との問題として考えると、都市と先住民世界との繋ぎということが非常に大事です。こういう繋ぎを大事にして、将来もっと村おこしをすることができるんじゃないかと、私は思っています。林業は今は非常に赤字になっていると言っていますが、世界の状況を見てみますと、日本の林業というのは非常にいい場所にあります。たとえば吉野と北山との距離は100キロしかありません。100キロ走れば次の林業地に行けるといところです。南米なんかでは、一日も二日も走っても次の林業地に行けないようなところはいくらかあるわけですから、日本では、そういうネットワークは大変しやすいわけですし、吉野なんかはなんぼでもやれることがあるんじゃないか、と思っております。

篤林家の役割

ケニアで会った篤林家なんですけど、自分の庭に一万本ばかりの樹種を植えておられます。それに全部名前を付けて、それを6カ月ごとに全部計って、その成長具合をJICAに報告している。それによってどのくらいの収入になるかまで計算しているんです。この人はセミナーを自分で開いて、周りの集落に伝える。それでいろんな技術をいつでも聞いてくださいという、非常にオープンな格好で地域の緑化に精を出している人です。

こういう篤林家というのは非常に大事であるというのがこのフォーラムの一つのポイントなんですけど、どこにでもこうした篤林家がいて、地域で独自の経験、試行錯誤を繰り返して、独自の技術を作り出す。それを地域に広める。それを実際にしている人は世界中にいて、私はそういう人を探し歩いているんですけど、その人たちと協力して、次の世代をより良い方向に導いていけないかと模索

しているわけです。篤林家を中心に、NGOとか、国際協力機関がネットワークを作る。

田舎は大体うまくいくんですが、問題は都会の、特に「会社人間」をどうするかというのが問題だと思うんですが、この辺をいかにクリアするかによって、将来ずいぶん変わると思っています。熟年層とか家庭人とか大学生なんかネットワークを作って意識改革をしていって、次世代の地球生態系がより良い方向に行けばよいと思っています。

世界のスイバとシャングリラ

最近ブータンに2度ほど行ってのんですが、ブータンというのは非常に小さな国で、反鎖国的な政策を取っておりますが、ここでは非常に持続的に資源を利用している。なによりも抑制的で、車もあまりありませんし、クーラーもありませんけれども、そういう中で人々は満足した生活をしている。非常に丁寧に、われわれに向かっても子供がお辞儀をしてくれる。



ブータンの子供たち

最後にラダックにもう一度戻ります。上の方にゴンパがありまして、川の淵にだけヤナギとポプラが植えてあります。ほとんど木がないんですが、ヤナギとポプラを植えることで、十分にそれを生かす。ヤナギの手入れを徹底的にやります。捨てるどころなく、徹底的に使います。



ラダックのリキル谷

ラダックを見ていますと、熱帯地方と違いまして、生態空間の制限が非常にあるわけですね。そういうところで、特に森林という見地からみますと、最初はラダックなんて森林無いんじゃないかと思ったんですが、実際はちょっとした木があって、それを何とかうまく使おうということをやっているわけです。

熱帯と比べると、熱帯の有り余る資源とは全く別の、必然的制約の中での姿勢と言いますか、充足感、こういうものは今後必要になって行くんじゃないかという風に思います。われわれの有り余るものの中で暮らしてきた体験から言いますと、結局多様化というのは行き過ぎると決していい方向にはいかない、ある程度制約があった方がむしろ充足感というのがあるんじゃないかなあ、というような感じで私自身は見てます。

日本には、特にモノがありすぎて精神世界の方がおろそかになっているというような所がありますから、これをもうちょっと上手いことやっていけないかなあ、というのが今の私の一つの課題なんです。

シャングリラを見て、そこは天空のスイバであるという風に位置付けているんですが、ストレスが非常に少なく、美的で、モノはないんですけども、非常にいい気持で生活できるというのがラダックの印象なんですね。これと同じような気持ちになれるのが、

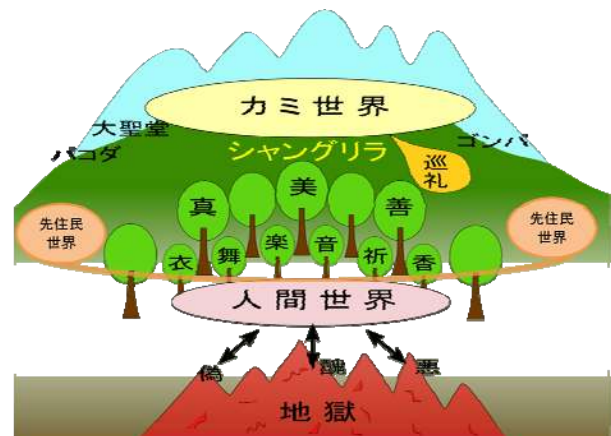
あちこちで私が接した先住民の人々の世界です。プナンの人の村に入って住むとやっぱり非常に気分がいいわけですね。雲南の村もそうですし、どこにもそういう世界がある。

先住民の世界と神世界

それで、今後、その先住民の世界が現代世界にどういうことができるかというのをプラス方向で考えるとするとですね、現代世界に対して警鐘を鳴らすことができるのではありませんか。有り余る物流、情報世界、それによって地球環境問題だとか資源戦争だとか、民族対立とか南北格差とかいっぱい問題が出てくるわけです。

要約しますと生態破壊と資源収奪というような恰好で、人の心が滅茶苦茶になっているという、そういう世界が現実にあるわけで、それに対して、「先住民の世界というのは違うんですよ、もっといいものがあるんですよ」というような、そういう警鐘を鳴らせる原点になれるのが先住民の世界ではないかと私は位置付けています。

ラダックに行った時に思ったのですが、シャングリラが一番近い「カミ世界」というのがあるとすればですね、いかにしてそれに近



「先住民世界」の位置（「カミ世界」があるとすれば）

づくかというのが人の世界が目指す一つの方向だと思うんですが、この「人間世界」というのは下の方にあって、なかなか神世界には行けない。しかし、おそらく先住民世界というのは普通の人間世界より上にあって、もっと神世界に近いところにいるんじゃないか。逆に言えば、今の人間世界をもうちょっと違う目で見られるのが先住民世界であって、その役目というのが非常に大きいのではないかと考えているわけです。

「素朴主義」

まあいろいろとごちゃごちゃ言いましたが、とにかくですね、たぶん皆さんもこんな風に思っておられるんじゃないかと思うんですが、今の世界の限界というのがあって、少なくとも資源と生態系の劣化というのはもう明らかですから、それから何とか脱却しなければならぬ。そこで生きてくるのが「制約の中での充足感」と持続的利用ということだと思います。それと「モノと心の平衡安定系」の創出というようなことで、今あちこちで行われていますが、生態系の多様性修復への努力と非破壊的利用。エコツーリズムなんかはその一つの例なんです、そんなこ

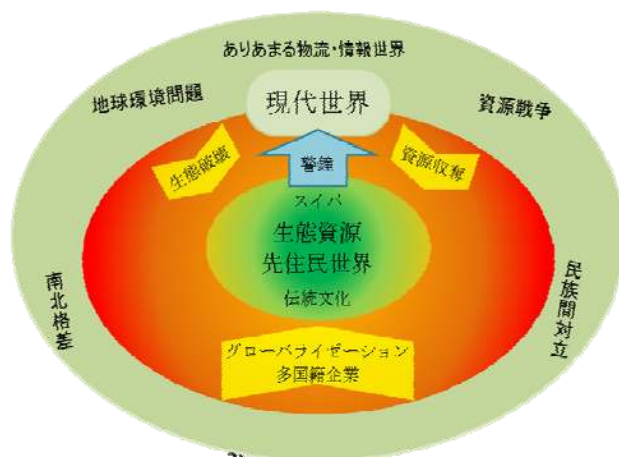


フォーラムで語る山田勇先生

とで、何とか人と森と都市が上手いことつながっていかないか、というようなことを目指してやろうではないかと考えているわけです。

私は教養の時に東洋史の宮崎先生に習ってまして、大変印象深かったです。大学の先生はこういう風でなければならぬと、先生の見本だと思ってるんですが、その先生の実集を今読んでまして、その中に「素朴主義」というのが出てきます。中国の明が腐敗してどうしようもない時に、北の辺境の素朴な民族が力を出して清という国を作ったという

くだりがあるわけなんです、「素朴主義というものが、腐敗に陥っている人類文明というのを救うことがあるんだ」ということを幾つかの例をあげておっしゃってるんです。今もおそらく長い歴史で見るとそんな時代ではないかなという気がします。今こそ素朴主義が生きてくる時代であるというふうに見て、その素朴主義こそが先住民の人々が持っている世界で、その力というのが、これから非常に重要ではないかと思っています。



現代社会への警鐘